

VI) 情報の提供、諸報告に関する事項

1. 情報の提供方法及び提供先

1) 郵送、FAX (*印は注意報のみ)

- 国関係
 - *農林水産省消費・安全局植物防疫課、*同中国四国農政局消費安全部、同松江統計・情報センター、同島根農政事務所(地域第一、二課)、気象庁松江地方气象台、同西郷測候所。
- 独立行政法人
 - 農業環境技術研究所、農業・生物系特定産業技術研究機構 中央農業総合研究センター、同果樹研究所 生産環境部、同果樹研究所ブドウ・カキ研究部、同近畿中国四国農業研究センター、同野菜茶業研究所。
- 他県関係
 - *鳥取、*岡山、*広島、*山口、*徳島、*香川、*愛媛、*高知、各府県担当課。
- 県内関係
 - 島根県農林水産部 農業経営課、同農畜産振興課、各松江、木次、出雲、川本、浜田、益田農林振興センター農業普及部、中山間地域研究センター、中海干拓営農センター、農業技術センター、花振興センター、農業大学校、隠岐支庁 農業普及部(島前地域振興グループ)、島根県立松江農林高等学校、同出雲農林高等学校、同邇摩高等学校、同矢上高等学校、同益田産業高等学校、同図書館、各市町村、各病害虫防除員
- 県内団体
 - 島根県農業協同組合中央会、全国農業協同組合連合会島根県本部、島根県農業共済組合連合会、県内各農業共済組合、農業振興協会、島根県農薬卸商協会。
- 報道機関
 - 山陰中央、朝日、毎日、読売、サンケイ、中国、島根日日各新聞社出雲支局・通信部、日本農業新聞松江支局・中国四国支所、NHK松江放送局、同出雲通信部、山陰放送、同ラジオ業務部、山陰中央テレビ放送局、日本海テレビ

2) ホームページ

発生予察情報(発生予報、特殊報、注意報、臨時情報)

2. 発表状況

(1) 発生予察情報の発表状況

種 類	発表回数	発表部数	対 象 病 害 虫
発生予報	7回	240部	<ul style="list-style-type: none"> ○イネ 葉いもち2回、穂いもち3回、紋枯病4回、白葉枯病3回 縞葉枯病2回、萎縮病1回、黄化萎縮病1回、ヒメトビウ ンカ3回、ツماغロヨコバイ5回、ニカメイチュウ4回、 セジロウンカ2回、トビイロウンカ3回、コブノメイガ2 回、斑点米カメムシ類3回、イネドロオイムシ1回、イネ ミズゾウムシ2回 ○ムギ うどんこ病2回、赤かび病2回、さび病類2回 ○ダイズ ハスモンヨトウ2回 ○ナシ 黒斑病6回、黒星病4回、赤星病2回、シンクイムシ類4 回、ハマキムシ類2回、ハダニ類6回、アブラムシ類3回、 カメムシ類1回 ○ブドウ 晩腐病3回、さび病3回、褐斑病4回、べと病3回、黒と う病1回、灰色かび病1回、ブドウトラカミキリ0回、 フタテンヒメヨコバイ5回、チャノキイロアザミウマ4回、 ハダニ類2回 ○カキ 円星落葉病1回、炭疽病1回、うどんこ病3回、カキミガ 2回、チャノキイロアザミウマ1回、カメムシ類3回、 カキクダアザミウマ1回 ○果樹全般 カメムシ類2回

種 類	発表回数	発表部数	対 象 病 害 虫
発生予報			○ハクサイ モザイク病 1回、軟腐病 2回、白斑病 1回、黒斑病 1回、べと病 1回 ○キャベツ 黒腐病 2回、菌核病 2回 ○ダイコン モザイク病 1回 ○アブラナ科野菜 コナガ 2回、ハスモンヨトウ 2回、アオムシ 2回 アブラムシ類 1回 ○メロン べと病 2回、ハダニ類 2回、アブラムシ類 2回 ○タマネギ ボトリチス属菌による葉枯れ 2回、白色疫病 1回、べと病 2回、腐敗病・軟腐病 2回 ○イチゴ 灰色かび病 2回、うどんこ病 4回、ハダニ類 2回 アブラムシ類 2回
特殊報	2回		○トマト黄化萎縮病 1回 ○タバココナジラミ バイオタイプQ 1回
注意報	2回		○イネ斑点米カメムシ類 1回 ○ハスモンヨトウ 1回
臨時情報	2回		○イネ穂いもちMBI-D剤耐性菌 1回 ○MBI-D剤耐性イネいもち病菌 1回

3. 発表内容

1) 特殊情報

(1) 第1号(平成17年 9月 9日)

7月下旬、益田市の施設栽培トマトにおいて、生長点付近の葉の黄化、葉巻する株が認められました。独立行政法人 農業・生物系特定産業技術研究機構 九州沖縄農業研究センター 病害遺伝子制御研究室に診断を依頼した結果、トマト黄化葉巻病(トマト黄化葉巻ウイルス、tomato yellow leaf curl virus、以下、TYLCV)であることが判明し8月24日付けで特殊報を発表しました。しかし、その後の九州沖縄農業研究センターの詳細な調査からこのウイルスがTYLCVではなく近縁のウイルスであるタバコ葉巻ウイルス(tobacco leaf curl virus、以下TbLCV)によるトマト黄化萎縮病であることが判明しました。そこで、トマト黄化葉巻病をトマト黄化萎縮病に変更して特殊報を発表します。

【概況】

7月下旬、益田市の施設栽培トマト(品種:ハウス桃太郎)において、生長点付近の葉の黄化、葉巻する株が認められた。独立行政法人 九州沖縄農業研究センターに診断を依頼した結果、トマト黄化萎縮病(病原:TbLCV)であることが判明した。

本病原ウイルスの発生は、1976年に奈良県、大阪府、和歌山県で国内最初に確認されている。

- 1 病害虫名 トマト黄化萎縮病
- 2 病原名 ウイルス(TbLCV:tobacco leaf curl virus)
- 3 作物名 トマト
- 4 初発生場所及び面積 益田市(1圃場)
- 5 発生生態

1) 病徴(トマト黄化萎縮病とトマト黄化葉巻病の識別困難)

初め頂葉が黄化・葉巻する。その後、葉脈間の黄化、縮葉の症状を示し、さらに症状が進むと、葉のちりめん状や萎縮症状を示す。発病前に着果した果実は正常に発育するが、発病後の花は蕾のまま落下する 경우가多く、開花しても結実しないことが多い。トマト黄化葉巻病とは、ほぼ同様の症状を示すため、病徴のみで、トマト黄化萎縮病とトマト黄化葉巻病を識別することは難しい。



生長点付近の葉の黄化・葉巻症状

2) 伝染経路（トマト黄化葉巻病と伝染経路は同じ。ただし、媒介虫はシルバーリーフコナジラミの近縁種のタバココナジラミ。両種識別困難）

本病原ウイルスは、タバココナジラミによって媒介される。このコナジラミが、罹病植物を吸汁することでウイルスを体内に短時間に取り込み、10日間以上も伝染能力を保持できる。経卵伝染はしない。

接触伝染、種子伝染及び土壌伝染は確認されていない。

3) ウイルス（TbLCV）の寄主範囲（トマト黄化葉巻病より広い）

トマト、タバコ、チョウセンアサガオ、スイカズラなどで確認されている。ナスには潜伏感染する。

6 防除対策（トマト黄化葉巻病と基本的に同じ）

- 1) 発病株を見つけたら速やかに抜き取り、土中に埋めるなどタバココナジラミに吸汁されないように処分する。また、伝染源であるスイカズラを除去する。
- 2) タバココナジラミは多くの植物に寄生するので、ハウス周辺の雑草除去をする。
- 3) 媒介昆虫であるタバココナジラミを防除する。
- 4) タバココナジラミのハウス内への侵入を防ぐために、開口部すべてに防虫ネットを張る。

7 その他

疑わしい症状が発生している場合は、病害虫防除所（0853-22-6772）に連絡する。

（3）第2号（平成18年 2月27日）

1 病害虫名 **タバココナジラミ バイオタイプQ** (*Bemisia tabaci* Biotype Q)

2 発生作物 **ピーマン、メロン**

3 発生確認の経緯

1) 平成17年秋に県内の施設野菜産地においてコナジラミ類の発生調査を実施した。その結果、県東部の2ほ場でタバココナジラミの発生がみられた。本虫を採取し、独立行政法人 農業・生物系特定産業技術研究機構野菜茶業研究所に遺伝子解析を依頼した結果、本県未発生のタバココナジラミ バイオタイプQであることが判明した。

2) 国内では、本県の他に西日本を中心に12県（平成18年2月23日現在）で発生が報告されている。

4 発生確認場所 県東部（ピーマン1圃場、メロン1圃場）

5 形態及び生態

1) タバココナジラミには、これまでに異なる41の系統（バイオタイプ）が存在し、国内では、在来2系統（バイオタイプ不明）、シルバーリーフコナジラミ（バイオタイプB）、バイオタイプQが確認されている。バイオタイプとは寄主選好性や寄主植物に与える生理障害の有無、個体群間の交雑能力の差異、遺伝子型の相違などの形態以外の生物的な性質が異なる系統のことである。

2) バイオタイプQはスペイン、イタリア、イスラエル、中国、アメリカなどで発生しているが、生態に関しては不明な点が多い。また、シルバーリーフコナジラミ（タバココナジラミ バイオタイプB）との形態上の差異は確認されていない。

3) バイオタイプQは他県での薬剤感受性試験の結果から、シルバーリーフコナジラミと比較して、ピリプロキシフェン剤や一部のネオニコチノイド系剤に対する抵抗性が高いことが報告されている。

4) タバココナジラミは、ナス科、ウリ科をはじめ多くの野菜や、花卉類、雑草等の多くの植物に

寄生が報告されている。

5) シルバーリーフコナジラミと同様に、トマト黄化葉巻ウイルス(TYLCV)を媒介することが確認されている。

6 防除対策

- 1) 生産地が明らかな苗を使用し、ウイルス病の発生に注意するとともにコナジラミ類の寄生が疑われる苗は使用しない。
- 2) 増殖源となる、ほ場周辺の雑草類の除去を徹底する。
- 3) 施設栽培ではの出入口やハウスサイド、天窓などの開口部には、できるだけ目の細かい(0.4mm程度が望ましい)防虫ネット等を張って、外部からのコナジラミ類の侵入を防ぐ。また、光反射資材織り込み寒冷紗や光反射マルチ、紫外線除去フィルム、黄色粘着板(テープ)等の物理的防除法を活用する。
- 4) 薬剤抵抗性が発達している可能性が高いので、上記の耕種的防除法や物理的防除法を実施した上で薬剤による防除を実施することが望ましい。また、有効薬剤に対する薬剤抵抗性の発達を回避するために、できるだけ同一系統薬剤の連用は避ける。なお、他県の薬剤感受性試験によると、ニテンピラム、ジノテフラン、ピリダベン等を成分とする薬剤の効果が高いことが報告されている。(表参照)

7 その他

疑わしいコナジラミが発生している場合は、病害虫防除所(0853-22-6772)に連絡する。

表 タバココナジラミ バイオタイプQに対して有効される主な薬剤

系統	薬剤名	成分	対象作物	希釈倍数 使用量/10a	使用時期	使用回数	
ネオニコチノイド系殺虫剤	ベストガード粒剤	ニテンピラム	トマト、ミニトマト	1~2g/株	定植時	1回	
				5g/培土1㎡	播種時又は鉢上げ時		
			キュウリ	1~2g/株	定植時		
			メロン	2g/株	定植時		
	ベストガード水溶剤	ニテンピラム	トマト、ミニトマト、ナス、キュウリ	1000~2000倍	収穫前日まで		3回
					収穫7日前まで		
	アルハリン/スタークル粒剤	ジノテフラン	トマト、ミニトマト	1g/株	育苗期	1回	
					定植時	1回	
			ナス	1g/株	定植時	1回	
					収穫前日まで	2回	
キュウリ					1~2g/株	定植時	1回
メロン	1g/株	定植時	1回				
		定植時	1回				
アルハリン/スタークル顆粒水溶剤	ジノテフラン	トマト	3000倍	収穫前日まで	2回		
		ミニトマト	3000倍	収穫7日前まで			
		ナス	3000倍	収穫前日まで			
		キュウリ	2000~3000倍	収穫前日まで			
殺ダニ剤	サンマイトフロアブル	ピリダベン	トマト、ピーマン	1000~1500倍	収穫前日まで	2回	
			メロン	1000~1500倍	収穫3日前まで		
生物農薬	ボタガードES	ボアヘリアバシアナ	トマト(施設)、ミニトマト(施設)、キュウリ(施設)	500倍	発生初期	—	
その他	オレート液剤	オレイン酸ナトリウム	トマト	100倍	発生初期~収穫前日まで	—	
天然物	粘着くん液剤	ヒドロキシプロピルセルロース	トマト	100倍	収穫前日まで	6回	

(注1) 対象病害虫は「コナジラミ類」、但しオレート液剤、粘着くん液剤は「タバココナジラミ」。

(注2) 薬剤を使用する際には農薬ラベルに記載の使用基準、注意事項等を確認し、散布圃場以外に飛散がないように注意する。



図 タバココナジラミ成虫



図 タバココナジラミ蛹

2) 注意報

(1) 第1号 (平成17年 7月20日)

クモヘリカメムシ、アカスジカスミカメなど斑点米カメムシ類の発生が多く、すでに出穂したハナエチゼンや周辺イネ科雑草ではカメムシ類が高密度に生息する圃場がみられます。今後コシヒカリ等の出穂に伴い、カメムシ類の圃場への侵入加害が増加し、斑点米が多発生する恐れがあるので注意報を発表します。

記

1. 病害虫名 斑点米の原因となるカメムシ類
2. 発生地域 県下全域
3. 発生時期 7月下旬～8月
4. 発生量 多い
5. 注意報発表の根拠

- 1) 7月16～19日に出穂している圃場ですくい取り調査を行ったところ、発生圃場率は75.0%(平成：7月下旬65.7%)、平均頭数は6.9頭(平成：同5.5頭)でいずれも平成を上回っている。特にクモヘリカメムシの生息密度が平成に比べて高く、すでに幼虫が多発生している箇所が山際の圃場を中心に見られる。
- 2) 予察灯でのアカスジカスミカメの誘引数は72頭(7月上旬累積、平成37頭、前年54頭)で平成に比べてやや多い。
- 3) 1ヶ月予報(7月15日広島地方気象台発表)によると、気温は平成並で晴れる日が多い見込みであり、カメムシ類の圃場への侵入が増加すると考えられる。

6. 防除対策および防除上の注意事項

- 1) 圃場周辺の除草は出穂の10日前までに行う。出穂前後の除草はカメムシを水田内へ追い込むことになるので、除草作業後に粉剤、液剤での即時防除を行うか、無人ヘリなどの防除計画に合わせて行うようにする。また、水田内のヒエなどはカメムシ類の増殖源となるので早急に処分する。
- 2) 粉剤、液剤による防除は、第1回目は穂揃期の3日後、第2回目はその10日後に散布する。その後、圃場に成虫や幼虫の発生が認められる場合には追加散布を行う。畦畔などにイネ科雑草がある場合は、畦畔を含めて散布する。広域的な一斉防除を行うと効果的である。
- 3) 粒剤による防除は出穂7～10日後に湛水状態でを行い、その後成虫や幼虫の発生に応じて追加散布を行う。
- 4) 本年のイネの出穂はやや早まり(－5)防除時期もやや早まると予想される。
- 5) 薬剤の使用に当たっては、農薬の使用基準ならびに農作物病害虫雑草防除指針の注意事項を遵守する。

7. 薬剤による防除

1) 種類、使用時期、使用回数及び使用量・濃度(本田期)

薬 剤 名	使用時期、使用回数及び使用量・濃度(本田期)		
スミチオン乳剤	収穫 2 1 日前まで	3 回以内	1000倍
スミチオン粉剤3DL	収穫 1 4 日前まで	3 回以内 (但し出穂前は1回)	3~4kg/10a
バイジット乳剤	収穫 3 0 日前まで	1 回以内	1000倍
バイジット粉剤2DL	収穫 2 1 日前まで	2 回以内	3~4kg/10a
P A P 乳剤	収穫 7 日前まで	3 回以内	1000倍
P A P 粉剤3DL	収穫 7 日前まで	3 回以内	3~4kg/10a
トレボンE W	収穫 2 1 日前まで	3 回以内	1000倍
トレボン水和剤	収穫 2 1 日前まで	3 回以内	2000倍
トレボン乳剤	収穫 2 1 日前まで	3 回以内	2000倍
トレボン粉剤DL	収穫 7 日前まで	3 回以内	3~4kg/10a
MR. ジョーカーE W	収穫 1 4 日前まで	2 回以内	2000倍
MR. ジョーカー粉剤DL	収穫 7 日前まで	2 回以内	3~4kg/10a
ベストガード粉剤DL	収穫 1 4 日前まで	4 回以内	4kg/10a
ベストガード粒剤	収穫 1 4 日前まで	4 回以内	4kg/10a
アドマイヤー粉剤DL	収穫 2 1 日前まで	2 回以内	4kg/10a
チェス水和剤	収穫 1 4 日前まで	2 回以内	2000倍
ジノテフラン顆粒水溶剤	収穫 7 日前まで	3 回以内	2000倍
ジノテフラン粉剤DL	収穫 7 日前まで	3 回以内	3kg/10a
ジノテフラン粒剤	収穫 7 日前まで	3 回以内	3kg/10a
ダントツ水溶剤	収穫 1 4 日前まで	3 回以内	4000倍
ダントツ粉剤DL	収穫 1 4 日前まで	3 回以内	3~4kg/10a
ダントツ粒剤	収穫 1 4 日前まで	3 回以内	3~4kg/10a

2) 散布時期および回数

粉剤と液剤は穂揃期3日後とその10日後の2回、粒剤は出穂7~10日後に散布する。その後は発生に応じて散布する。

3) 散布量

10a当り液剤150%、粉剤、粒剤は所定量を散布する。

8. 附表

第1表 出穂した水稻におけるカメムシ類の発生状況(7月下旬)

年次	発生圃場率 (%)	合計 (頭)	ホソハリカ メムシ	トゲシラホ シカメムシ	シラホシカ メムシ	クモヘリカ メムシ	アカスジカ スミカメ
2005	75.0	6.9	1.2	0.3	0.0	2.0	3.4
平均	65.7	5.5	2.0	0.7	0.2	0.5	2.1
2004	78.6	5.1	0.3	0.5	0.0	0.0	4.5
2003	78.0	5.0	1.6	0.7	0.4	0.1	2.1
2002	46.0	7.4	4.2	0.2	0.4	0.9	1.7
2001	85.3	10.9	4.1	1.1	0.1	0.9	4.7
2000	80.5	9.9	2.7	2.0	0.2	1.2	3.8
1999	82.6	6.8	2.1	1.5	0.6	1.6	1.0
1998	52.0	3.1	1.2	0.4	0.0	0.0	1.5
1997	56.3	3.3	1.8	0.2	0.0	0.0	1.3
1996	41.7	1.0	0.5	0.2	0.0	0.3	0.0
1995	55.6	2.9	2.2	0.2	0.2	0.2	0.1

※本年は7月中旬の調査である。

(2) 第2号(平成17年 9月 1日)

キャベツなどのアブラナ科野菜やダイズ、ソバ等でハスモンヨトウによる被害が多発生することが予想されますので注意報を発表します。現地では発生状況の把握に努め、適切な防除対策を講じてください。

1. 病害虫名 ハスモンヨトウ
2. 発生地域 県下全域
3. 作物 アブラナ科野菜(キャベツなど)・ダイズ、ソバなど
4. 発生時期 9月上旬~
5. 発生量 やや多い~多い

6. 注意報発表の根拠

- 1) フェロモントラップによるハスモンヨトウ雄成虫の誘殺数は平年に比べてやや多い(表1)。
- 2) 8月下旬の夏秋キャベツでは寄生株率、発生圃場率ともに高い(表2)。
- 3) 8月下旬のダイズでは白変葉の発生がやや多く、発生圃場率が高い(表3)。
- 4) 現在、若齢幼虫が主体であり、今後幼虫の分散とともに寄生株率の上昇が懸念される。
- 5) 9月の気象は、気温は高く、降水量は平年並みと予想されており、本種の発生にやや助長的である。

7. 耕種法による防除

ダイズ

白変葉の発生に注意し、若齢幼虫を葉ごと切り取ってつぶす。

8. 薬剤による防除

1) 種類および濃度

キャベツ、ハクサイ、ダイコン

薬 剤 名	キャベツ	ハクサイ	ダイコン
	(収穫前日数/総使用回数)		
有機リン剤			
PAP乳剤 1000倍	14日/4回	21日/3回	30日/2回
レルダン乳剤25 1000倍	7日/4回	30日/2回	30日/2回
ホスパー乳剤 1000倍	21日/1回	30日/1回	30日/1回
IGR剤			
アタブロン乳剤 2000倍	7日/4回	7日/4回	14日/3回
カスケード乳剤 2000~4000倍	14日/2回	—	—
マッチ乳剤 3000倍	7日/3回	—	—
ファロンフロアブル 2000~4000倍	7日/2回	—	—
カーバメート剤			
ランネート45水和剤 1000~2000倍	3日/3回	—	—
ラービフロアブル1000倍	—	—	21日/2回
ラービフロアブル750~1000倍	7日/4回	7日/2回	—
BT剤(農作物病害虫雑草防除指針参照)			
その他の殺虫剤			
アフーム乳剤 1000~2000倍	7日/3回	—	—
ガンバ水和剤 1500倍	21日/2回	—	—
トルネードフロアブル 2000倍	7日/2回	—	—
マトリックフロアブル 2000倍	7日/4回	—	—
プレオフロアブル 1000倍	7日/2回	—	—
コテツフロアブル 2000倍	7日/2回	—	—

ブロッコリー

薬 剤 名	(収穫前日数/総使用回数)
PAP乳剤 1000倍	21日/2回
DDVP乳剤(75%) 1500~2000倍	7日/6回

ソバ

薬 剤 名	(収穫前日数/総使用回数)
IGR剤	
ロムダンフロアブル 2000倍	21日/2回
BT剤(農作物病害虫雑草防除指針参照)	

ダイズ

薬 剤 名	(収穫前日数/総使用回数)
合成ピレスロイド剤(農作物病害虫雑草防除指針参照)	
有機リン剤	
PAP乳剤 1000倍	7日/2回
PAP粉剤2	7日/2回
オルトラン水和剤 1000倍	60日/3回
ダーズバン乳剤40 1500倍	7日/2回
IGR剤	
アタブロン乳剤 2000倍	14日/2回
ノーモルト乳剤 2000倍	14日/2回
ロムダンフロアブル 2000倍	14日/3回
ロムダンゾル 1000倍	14日/3回
ロムダン粉剤DL	14日/3回

BT剤（農作物病害虫雑草防除指針参照）

カーバメート剤

ラービフロアブル 750～1000倍 14日／2回

ランネート45水和剤 1000～2000倍 14日／4回

その他の殺虫剤

トルネードフロアブル 2000倍 7日／2回

マトリックフロアブル 2000～3000倍 前日／3回

2) 散布量 10a 当たり液剤100～300 $\frac{1}{10}$ 、粉剤 4 kg

3) 散布時期・留意点

現在発生が多い圃場では直ちに散布する。その後は発生に応じて散布する。系統の異なる薬剤をローテーション散布する。

4) その他の注意事項

(1) 本種は上記の作物のほか花き類、ナス、トマト、ヤマイモ、ネギ、タマネギ、イチゴ、ブドウ、カキなど多くの作物を加害する。

(2) 老齢幼虫には薬剤の効果が劣るので若齢幼虫期に重点をおいて防除する。

(3) 施設栽培ではハウスサイド、出入り口、天窗等の開口部に防虫のネットを被覆するなど、成虫の侵入防止に努める。

(4) 農薬使用指導を行う場合は、必ず最新の「農薬登録情報」を確認してください。

9. 付 表

表1 フェロモントラップによるハスモンヨトウの雄成虫の半旬別誘殺数(頭)

調査地点		調 査 時 期							9月 1半旬
		7月 第6半旬	1半旬	2半旬	8月 3半旬	4半旬	5半旬	6半旬	
出雲市	本年	110	60	111	153	176	186	105	154.8
	平年	44.8	72.9	89.5	106.5	54.4	73.7	134.8	
益田市	本年	143	84	69	83	215	314	—	286.2
	平年	123.6	127.0	112.2	152.6	225.7	195.9	304.0	

表2 ハスモンヨトウの発生状況（夏秋キャベツ）

調査月日		寄生株率 (%)	発生圃場率 (%)
8月29, 30日	本年	13.3	66.7
	平年	4.9	36.6

表3 ハスモンヨトウの発生状況（ダイズ）

調査月日		1a当たり白変葉か所数	発生圃場率 (%)
8月29, 30日	本年	1.4	72.4
	平年	1.0	44.1

3) 臨時情報

(1) 第1号（平成17年 4月 4日）

穂いもちにおけるMB I-D剤耐性 イネいもち病菌の発生について

イネいもち病の防除薬剤であるMB I-D剤（シタロン脱水酵素阻害型メラニン合成阻害剤、商品名：ウィン、デラウス及びアチーブの名前を含む剤）に対する薬剤耐性菌は、近年、西日本地域で発生が顕在化し、いもち病の多発生要因の一つとなっています。

島根県の発生状況は、平成16年11月2日付で臨時情報として、葉いもちで耐性菌率が西部で44.0%、東部で11.3%と発表しました。今回は、穂いもちの耐性菌率を調査するために、昨秋県内各地から穂いもちの罹病標本を採取し、耐性菌検定を実施しました。その結果、葉いもちとほぼ同様な結果が得られましたので、臨時情報を発表します。

記

1. MB I - D 剤耐性菌の発生状況

- 1) 巡回調査地点を中心に穂いもちが発生した圃場120圃場から病斑を採取し、1圃場から1菌株ずつ耐性菌検定に供試した結果、供試菌株の15.8%で耐性菌の発生が認められた(表1)。
- 2) 地域別では県西部で発生が多く、耐性菌率は23.3%と県東部の約2倍であった(表1)。
- 3) 15年度の耐性菌の発生は95菌株中1菌株のみであったことから、耐性菌の割合は大幅に増加しており、発生地域も拡大しているものと推察される(表1)。

表1 MB I - D 剤耐性菌の発生状況

年次	調査部位	調査地域	調査圃場数	耐性菌発生圃場率	調査菌株数	耐性菌率
H16年	穂いもち	県全体	120	15.8%	120	15.8%
		東 部	77	11.7	77	11.7
		西 部	43	23.3	43	23.3
H16年 (11月臨時情報)	葉いもち	県全体	92	28.3%	128	30.5%
		東 部	42	11.9	53	11.3
		西 部	50	42.0	75	44.0
H15年	葉、穂	県全体			95	1.1

2. 防除対策

薬剤耐性菌の分布が拡大傾向にあることから、MB I - D 剤の取り扱いには注意する。

- 1) 耕種的な防除対策(健全種子の更新、塩水選、種子消毒の実施)を徹底する。
- 2) 当該薬剤を使用して防除効果の低下が確認された場合は、作用機作の異なる薬剤による追加防除を行う。
- 3) MB I - D 剤を使用したにもかかわらず本田初期からいもち病の発生が活発にみられた地域では本剤耐性菌の発生が懸念されるので、作用機作の異なる箱処理剤(Dr.オリゼ剤、ビルダー剤、ブイゲット剤、デジタルコラトップ剤、ビーム剤等)を使用することが望ましい。

参考 農林振興センター別、穂いもちのMB I - D 剤耐性菌の発生状況

農林振興 センター名	調 査 圃場数	耐 性 菌 発生圃場率	調 査 菌株数	耐性菌率
松 江	26	19.2%	26	19.2%
木 次	27	11.1	27	11.1
出 雲	24	4.2	24	4.2
川 本	12	8.3	12	8.3
浜 田	15	0	15	0
益 田	16	56.3	16	56.3

(2) 第2号(平成17年11月15日)

MB I - D 剤耐性イネいもち病菌の発生状況について

イネいもち病の防除薬剤であるMB I - D 剤(シタロン脱水酵素阻害型メラニン合成阻害剤、商品名:ウィン、デラウス及びアチーブの名前を含む剤)に対する薬剤耐性菌は、近年、西日本地域で発生が顕在化し、いもち病の多発生要因の一つとなっています。

島根県では、平成15年度から耐性菌の調査を行ってきました。今年度も、本剤に対するいもち病菌の感受性を調査するために、今夏県内各地から葉・穂いもちの罹病標本を採取し、耐性菌検定を実施しました。その結果、県東部で耐性菌率が高くなりましたので、臨時情報を発表します。

記

1. MB I - D 剤耐性菌の発生状況

本年は、県内でのいもち病の発生が平年と比べて極端に少なく、特に県西部ではほとんど採取ができなかったことから調査地域が偏っている。

- 1) 巡回調査地点を中心に葉・穂いもちが発生した76圃場から病斑を採取し、1圃場から1菌株ずつ耐性菌検定に供試した結果、葉いもちは供試菌株の36.4%、穂いもちは30.9%で耐性菌の発生が認められた(表1)。

2) 県東部では、H16年度の耐性菌発生圃場率は葉いもちで11.9%、穂いもちで10.4%であったことから、本年の耐性菌の割合は大幅に増加している（表1）。

表1 MBI-D剤耐性菌の発生状況

年次	調査地域	葉いもち		穂いもち	
		調査圃場数	耐性菌発生圃場率	調査圃場数	耐性菌発生圃場率
H17年	県全体	22	36.4%	54	30.9%
	東 部	19	42.1	40	34.1
	西 部	3	0	14	21.4
H16年	県全体	92	28.3%	120	15.0%
	東 部	42	11.9	77	10.4
	西 部	50	42.0	43	23.3

2. 防除対策

薬剤耐性菌の分布が拡大傾向にあることから、MBI-D剤の取り扱いには注意する。

- 1) 耕種的な防除対策（健全種子の更新、塩水選、種子消毒の実施）を徹底する。
- 2) MBI-D剤を使用したにもかかわらず本田初期からいもち病の発生が活発にみられた地域では本剤耐性菌の発生が懸念されるので、作用機作の異なる箱処理剤（Dr.オリゼ剤、ビルダー剤、ブイゲット剤、デジタルコラトップ剤、ビーム剤等）を使用することが望ましい。
- 3) 当該薬剤を使用して防除効果の低下が確認された場合は、作用機作の異なる薬剤による追加防除を行う。

参考 農林振興センター別、MBI-D剤耐性菌の発生状況

農林振興 センター名	葉いもち		穂いもち	
	調査圃場数*1	耐性菌発生圃場率	調査圃場数	耐性菌発生圃場率
松 江	15	53.3% (15.4)	31	45.2% (19.2)
木 次	3	0 (0)	2	0 (11.1)
出 雲	1	0 (11.1)	7	0 (0)
川 本	2	0 (28.6)	6	0 (8.3)
浜 田	1	0 (0)	8	37.5 (0)
益 田	0*2	- (68)	0	- (56.3)

* 1 : 1圃場から1菌株を調査した。

* 2 : 巡回調査で発病圃場を確認できなかった。

注 : ()内の数字は平成16年度の耐性菌発生圃場率。